

「私は、あなたのしたことを許さない」

この震えはどこからくるものなのだろう。

自分でもわからない胸の内に戸惑いながらも、けれど、たしかな意思がそこにはある。

床に落とした視線をあげることが、できなかった。

ルルの言葉が、胸に突き刺さる。

けれど、痛みを感じることもさえ、俺には許されなかった。

だって、本当に痛いのはきっと、ルルのほうだから。

言葉を探そうとするたびに、喉の奥が絞められるように苦しくなる。

ただ、その場に立ち尽くすしかできなかった。

「万能薬が必要なら……」

いつ誰に、万能薬を使うのか。

他者の行為によってその決断を迫られるとは、思ってもいなかった。

「あげるわ」

絞り出した声は、届いただろうか。

「うん」

ツバメは薬のために来た。

それを手に入れたら、もうここにいる理由もない。

「だから、もう……」

「うん」

その先を聞きたくなかった。



彼女の言葉で、突き放されるのがこわかった。

背を向けた途端、後悔が込みあげてきた。

けれど、もう、選んでしまった。

手の中で輝く葉が、その証^{あか}しだ。

あれほど手に入れたかったものなのに、今はただ、重い。

ツバメの背が、廊下の奥へゆっくりと消えていく。

その姿が見えなくなっても、足音だけが、やけに響いて聞こえた。